

掃き溜めの鶴とはよく言ったものだ。
彼女の源氏名は優里。
そんな事情で置屋に来たのかはわからないが、容姿端麗で若く朗らかな優里は、
あれよあれよという間に温泉街で一番の売れっ子になった。

ある日、街の中心にあるお尋ね所へ行った優里は、
「貴女には観音様ががついているから、必ず観音経をあげるように」と言われたという。
そう言われれば、確かに観音様のような面差しなのだ。

水商売を渡り歩いてきたに違いない彼女は、タバコを吹かしても、はすっぱな言葉を使
っていても、どこか憂いがあり、上品さが漂っている。
おでこをきれいにし出して、頭のとっぺんで髪をまとめた姿には、神々しささえ感じるほ
どだった。

売れっ子の彼女は連日連夜、座敷に呼ばれた。
そんなある日、置屋の上客である山添の座敷に優里が入ることになる。

山添は東京の女将の友人で、時の首相とも度々会食をするような大物だったが、
所謂企業ヤクザであり、刑務所に入っている間も様々な資格を取得し、それをビジネス
に繋げるほどの切れ者だった。

しかし、その風貌にはやはり只者ではない威圧感があつた。
以前も、ここから芸者を愛人に迎え、広島の高級マンションの最上階を一フロアに改装
して住居にしたことがある。一度、女将に連れられて行ったのだが、当時は見たことも
ないような大画面のテレビと、広島専用のリムジンがあることに驚いたものだ。

山添には外国人を含め、何人もの愛人がいたが、縁が切れた女性たちの面倒も死ぬまで
見るという信条を貫いていたため、捨てた女からも恨まれることはなかった。

そんな山添が、優里を見染めた。
女将に向かって、「母さん、この子を連れて行くわ」と、優里を見受けたいと言うの
だ。

女将は「山さん、また〜？ 困るわよ！ この子はまだ来たばかりなんだから」と慌てる。
それも無理はない。近年稀に見る美しい鶴を連れて行かれては、店としても大きな痛手
だ。
しかし、こればかりは仕方がない。

優里自身もそれを望み、山添の新しい愛人になった。

置屋を出てからの優里は、山添と共に温泉を訪れ、やがて自分がいた置屋の芸者たちを座敷に招くようになる。

芸者の衣装を脱ぎ、旅館の浴衣に身を包んだ優里は、湯上がりでほんのりと額を紅に染め、帯の結びがほゞけるような華奢な佇まいと相まって、その姿は一層しなやかに羽を広げた白鶴のようだった。

昔の同僚たちから見れば、急に大出世した優里が羨ましくもあり、妬ましくもあり、複雑な心情が透けて見える。

そして優里自身もまた、一番年下だった自分が姐さんたちを座敷に呼ぶ立場になり、どこか居心地悪そうにしているようだった。

万札が飛び交う。

それからの優里は、山添に六本木にクラブを出してもらい、愛人の王道を突き進んだ。

優里が置屋を去ってしばらく経ったある日、芸者衆がこんな話をしているのを耳にした。「山添さんの背中にはね、きれいな観音様がおるとよ。湯上がりで火照った観音様の、艶めかしいことったら…」

山添の背中には、観音様の刺青が彫られていたというのだ。

なんということだ。

優里はやはり観音様に導かれていたのだ。

山添こそが、優里の観音像だったのだろう。

そして月日が流れ、優里が若くして亡くなったことを知る。

あの白鶴のようにしなやかな姿は、もう何処にもいない。

優里は、観音経を唱えたことがあったのだろうか。

山添の背中に羽を休めている間に忘れてしまったのかもしれない。

私は、あの日温泉街のお尋ね所で優里が言われた観音経を、胸の奥でひと節ひと節、囁みしめるように唱えた。

湯けむりの彼方で、白鶴が一声鳴き、消えていくのが見えた気がした。